

# hgu\_LAB. MAGAZINE

011



June 2021

vol.

CINÉPHILE

Genki Yonetsu



# May the Force be with you.

from the film "STAR WARS"



## Genki Yonetsu

米津 元気

北海学園大学 人文学部 1部  
日本文化学科 4年  
北海道稚内高等学校出身

稚内市生まれ。大学では1年次から「放送研究会」に所属し、3年次には会長を務めた。NHK全国大学放送コンテストのラジオドラマ部門に自作を応募し、準決勝まで進出した経験も。大学生活の途中から映画熱が高まり、ハイペースで鑑賞するとともに、映画を専門とするゼミにも所属し、映画に没頭する日々を過ごしている。好きな映画の台詞は、『スター・ウォーズ』シリーズの“May the Force be with you.” (フォースと共にあらんことを)

# ぼくにとって映画とは「刺激物」。 いろいろな影響を与えてくれます。

映画の感想は、人によってバラバラ。「傑作」も「駄作」も観る人次第。

同じ映画を観ながら、違う何かを得ているというのは、とてもおもしろいですよね。

それはまるで、使い手によってまったく異なる力として発現してしまうフォースのよう……

というのは米津くんが何度も観たという『スター・ウォーズ』の話ですが、

とにかく、あなたの映画の感想は、あなただけの宝物なんだと思います。

あなたはどんな映画が好きですか？ あなた自身のストーリーを変えた映画はありますか？

今回は、現役学園大生でもっとも映画に魅了されているであろう米津くんのストーリーに迫ります。

## はじまりの7時間18分

——映画、どのくらい観るんですか？

数でいえば、去年(2020年)は映画館と家で鑑賞を合わせて、1年間で353本観ました。平均すると1日1本ほどですが、3本観たりする日もありますが、逆に忙しくて1本も観られない週もあります。

——好きなジャンルは？

何でも観ますが、今もっとも好きなのはホラーですね。ステイホームで刺激が少ないので、刺激を求めるならホラーだろうと思って観はじめたら、ハマりました。なぜこの霊が出てくるのか、なぜ追いかけるのか、理由がわからないタイプの作品がとくに好きです。意味不明なほうが怖いじゃないですか。めちゃくちゃくだらないゾンビ系とかも大好きですね(笑)

——ちなみに、もう何年もハイペースで映画を？

ここまで観るようになったのは去年の1月からです。

——どんなきっかけが？

2019年11月に『新聞記者』という邦画を観たくてネット検索をしたところ、シアターKINO(札幌市中央区南3条西6丁目)というミニシアターがヒットしました。行ってみると、ぼくの勘違いで『i-新聞記者ドキュメント』という別の作品だったんですけど(笑)。まあでも、初めてのKINOだし、せっかくだからということでそれを観て。その帰りにもらった上映情報のリーフレットを眺めていたら、とんでもない上映時間の作品を見つけてしまったんです。ハンガリーの閉鎖的な村で暮らす人々を描いた『サタンタンゴ』という作品で、7時間18分。そんなに映画館にいるってどんな感覚なんだろう？ 観たい!と思って友だちを誘いましたが、みんなに断られ、結局1人で行ったんです。忘れもしない2019年12月28日、試練のような7時間を過ごしました(笑)。最初の4、5時間は本当に話が進まないんですよ。村人たちがただ歩いているシーンを5分くらい長回しするとか。この7時間があれば、別の作品なら3本は観れたなと思って、そこから2020年は映画をたくさん観ようという気持ちになりました(笑)

——ものすごくポジティブ(笑)。観た本数はどうやって数えているんですか？

スマホのメモ帳アプリで番号をつけてリスト化しています。あと、観た映画は「Filmarks(フィルマークス)」というレビューサイトに感想を書いています。

## 重なりあう映画とリアル

——レビューのことは事前に聞いていたので、少し読ませてもらいました(「fyoneyama1214」でユーザー検索)。

点数をつける基準は？

ストーリーや音楽などを総合的に考えながら、5点満点中3.5点を基準にしています。3.6は基準より少し上、3.7はそこそこおもしろい、3.8はその月で一番、3.9はかなりおもしろいけどDVDを買う一歩手前、4を超えると何回でも見返したいおもしろさという感じです。

——なるほど。1つ1つのレビューはそんなに長くないとか、コンパクトにまとめている感じですね。

そうですね。誰かに読まれることはあまり意識せず、それを読めば自分が感想を思いつける程度に書いています。強くおすすめしたい作品の場合は、けっこう長くなったりのするんです。

——『カセットテープ・ダイアリーズ』という青春音楽映画のレビューは比較的長く、米津くんの高校時代の記憶とリンクした内容で、大学入学の経緯も綴られていますね。

生まれ育ったまちを出たかったと。

そうですね。地方のまちなので、自分には刺激が足りなかったというか。

——それはもしかしたら、先ほどの『サタンタンゴ』に登場する村人の気持ちに通じるような？

たしかに当時の自分とリンクして響いた部分もあります。『サタンタンゴ』では1軒の酒場に村人が集まってひたすら踊るんですが、ぼくのまちなでもパーティが1つあって、みんなそこに集まっていたことを思い出したり。

——そして、『カセットテープ〜』のレビューによれば、まちを出るには国公立大学進学が条件だったと。

はい。教職免許を取れる国公立大学に進もうと考えていました。でもうまくいかず、絶望のなかで両親に自分の思いを伝えたところ、私立大学を選択肢に加えられることになりました。

——それで選んだのが本学ということですね。

そうですね。好きな日本史を学べる日本文化学科に魅力を感じ、教員免許も取得できるので。今は高校の国語科の免許取得をめざしているところです。

## My Favorite Movies

### 米津くんイチオシ映画を誌上レビュー!

#### ホラーTOP3

##### 1 呪怨

清水崇監督/2003年/日本

音で驚かしたり、物陰から突如出てきたり、お化け屋敷的な怖さがたまりません。約20年前のカメラの荒さが呪いのビデオ感を強調していて、今の技術でつくるのは逆に難しいのでは? くれぐれも独りでは観ないように!

##### 2 ザ・フライ

デヴィッド・クローネンバーグ監督/1986年/アメリカ

自らの遺伝子にハエの遺伝子が混ざってしまい、日ごとハエになっていく科学者。強欲に力を得ようとする罰が当たるといふ教訓を与えてくれます。びっくり演出は少ないので、ホラーが苦手な人にもオススメです。

##### 3 怪怪怪物!

ギデンス・コー監督/2017年/台湾

高校生の悪ガキに捕まった怪物の子どもが虐待を受けるという話で、怪物と人間の立場が通常とは逆転しています。弱者をいじめて快楽を得ようとする人間……本当に恐ろしいのは、お化けよりも人間かもしれませんね。

#### 2021年公開TOP3

##### 1 花束みたいな恋をした

土井裕泰監督/2021年/日本

菅田将暉と有村架純、オタクな趣味をもつ2人が運命的に出会うものの……。結婚とはどういうことか、何を目的に働くのか、いろいろと考えさせられます。共感するところが多くて、グッと世界観に引き込まれました。

##### 2 シン・エヴァンゲリオン劇場版:||

庵野秀明監督/2020年/日本

1995年から始まり、思春期の精神の不安定さを忠実に描いてきたシリーズがついに完結。成長したキャラクターたちの様子に思わず感涙。日本のアニメのバトンを次世代に渡すという監督のメッセージを強く感じました。

##### 3 街の上で

今泉力哉監督/2021年/日本

学生の自主制作映画に参加することで、主人公を取り巻く環境や生活が一変していく……。挑戦すれば、失敗もつきもの。でも無意味なことなどひとつもない。自分も何かに挑戦してみよう!と思わせてくれる作品です。

#### 高校生に観てほしいTOP3

##### 1 ギフテッド

マーク・ウェブ監督/2017年/アメリカ

天才的な知能をもつ女の子が、周囲との違いに苦悩しながら、自分が求める幸せを掴むために行動していきます。大人が期待する未来と本人が望む未来は合致するのでしょうか。進路を決める前にぜひ一度観てほしいです。

##### 2 ワンダー 君は太陽

スティーヴン・チョボスキー監督/2017年/アメリカ

他の子と大きく異なる顔をもち、学校で避けられてしまう少年。そんななかで彼がとった行動により、周囲が変化していきます。自分を理解し行動することで、壁を乗り越えていける。そんなことを教えてくれる物語です。

##### 3 チョコレートドーナツ

トラヴィス・ファイン監督/2012年/アメリカ

同性愛者のカップルが発達障がいの子を育てるために家族になろうとしますが……。同性愛者や障がい者が社会から理解されるようになって、法律などのルールはまだまだ残酷だということが生々しく描かれています。





## 金曜18時半は 「元気が出るラジオ」

——ちなみにどんな高校生活でしたか？

バドミントン部に入っていたのと、あとは地元のコミュニティFM局のラジオ番組に出ていました。

——ラジオ出演というのが気になります。

中学時代からラジオが好きで、いくつかの番組にメールを送っては夜更かしをしていました。好きな番組をクリアに録音するため、自分の部屋に大きなアンテナを張ったあたりで親は呆れていましたが、一方で「そんなに好きなら、ラジオでしゃべらせてもらいなさい」と(笑)。たしかにラジオの仕事には興味があるけど、それは裏方の仕事で、しゃべりたいわけではないと反論しても、「絶対何かのためになるから」と。それで高1のときにラジオ局に行って、「番組をやりたいです」とお願いしたところ、本当にやらせてくれることになりました。月に一度、金曜日18時半からの30分番組で、名前は「元気が出るラジオ」です(笑)

——聴けば元気が出る、そして米津元氣くんが出るという2つの意味で(笑)。とくに訓練もなく？

完全にいきなり(笑)。ただ、最初の1年ほどはスタッフの方に機材の操作を手伝ってもらって。それ以降は録音から編集まですべて1人でやっていましたね。

——ということは、生放送ではなく収録？

はい、部活が休みの日の放課後、まず映画館に行って、それからラジオ局に行って収録を。フリートークがあって、音楽をかけて、いただいたメールリアクションをして、という感じのトーク番組ですね。

——貴重な経験！ お母さんに感謝ですね。

何でもやってみなさいという親だったので、とりあえずやってみるスタイルが身についた気がします。『サタタンゴ』を観に行ったのもそうですし(笑)

## 大学生ならではの 時間の使い方

——その他、やってみた系エピソードはありますか？

昨年9月、映画監督の今泉力哉さんが「札幌にいます。時間がある人、会いませんか？」とツイートして。自分が声をかけたらどうなるのかと思いDMを送ったら、会ってくれて(笑)。「ぼくの映画を観たことは？」と聞かれたのですが、ほぼ観ていなくて、「それでよく声をかけたね」と笑われました(笑)

——それからは今泉監督の作品もよく観ている？

そうですね。今年4月に公開された『街の上で』はめちゃくちゃよかったです。劇中で相撲の話をするエピソードがあるんですけど、今泉監督がぼくに相撲の話をしてくれた思い出が重なったりもしました。

——それはいいですね。ところで少し話を戻しますが、高校時代も放課後に映画を観に行っていたということで、当時から映画は好きだったんですね？

観ていたほうかもしれません。小さいころは『スターウォーズ』が大好きで、映画の名台詞といえば、真っ先に思い出すのは“May the Force be with you.”(フォースと共にあらんことを)です。「グッドラック」的な意味合いで、自分でも言いたくなる言葉ですね。

——大学では映画研究会に入ろうとは思わなかった？

入学当初は映画よりもラジオだったので、放送研究会を

選びました。今ぐらい映画にどっぷりだったら映画研究会に入っていたかもしれませんね。

——放送研究会ではどんな活動を？

アナウンスや朗読などが中心のひと、映像や音声の作品づくりが中心の人がいて、大きく2つに分かれて活動している感じです。ぼくは後者ですね。

——脚本、撮影、編集のなかで好きな作業は？

撮影です。みんなでやっている感じが好きなので。今、仲間たちと卒業までに最後の1本を撮りたいと考えているところです。コメディかホラーを(笑)

——ゼミでも映画を学んでいるということで(下の対談を参照)、映画にどっぷりの大学生活ですね。

はい、大学生にしかできない時間の使い方、自分のやりたいことにたっぷり時間を使えたかなと思います。昨年の353本という数字も、1つの証明になっているのではないかと。両親もやりたいことをやっているのならOKという感じで認めてくれています。

——そんな米津くんにとって映画とは？

簡単にまとめれば「刺激物」かなと最近は思っています。人とのコミュニケーションを刺激するし、出てきた食べものも食べたくなるし(笑)。とにかくいろんな影響を与えてくれるので、やめられません。

——卒業後は映画関係に進むことも考えている？

もちろん映画をはじめとしたメディア関連の仕事にも興味はありますが、今はまず、教職免許を取ることを最優先の目標にして学んでいるところです。

——どのような道を選ぶにせよ、“May the Force be with you.”ですね。

はい、フォースを信じてがんばります(笑)

## My Favorite Teacher

### 感想を語りあい、 映画の深層へ

—— まず、大石先生の専門である「映画美学」について簡単に教えてください。

**大石** 美学というのは、哲学と置き換えてもいいかもしれません。要するに映画について理論的に考えるということです。その際、私は具体的な作品に即して考えることが重要だと思っていますので、授業やゼミでも映画を観てから、その映画について語りあうというかたちで進めています。

**米津** 3年生のゼミでは『映画とは何か』という本に掲載されている作品をいくつか観ましたね。

**大石** 世界でもっとも有名かもしれないフランスの映画批評家、アンドレ・バザンの本だね。

—— そのなかでとくに印象に残っている作品は？

**米津** 『自転車泥棒』(ヴィットリオ・デ・シーカ監督/1948年/イタリア)はおもしろかったです。壮大な話ではないんですけど、感動的な作品ですよ。

**大石** 自転車がなくて仕事ができない男が自転車を盗まれてしまうというね。それまでの映画では英雄的な主人公が歴史を動かすような大きな話が主流だったけど、こ

の時代あたりから「ネオリアリズム(新現実主義)」とって、庶民の小さな暮らしを描く作品が出てきた。これがたまらないんだよね。子役もすばらしい。

—— どのような対話をしながら、映画への理解を深めていくということだと思いますが、ゼミを通して米津くんの映画の観方に変化はありましたか？

**米津** 画面の外を意識するようになりました。たとえば『七人の無頼漢』(パッド・ベティカー監督/1956年/アメリカ)という西部劇の河原のシーン。体を洗っている女の人を男たちがチラチラ見ているんですけど、実際には女の人は映ってないという。

**大石** そう、水紋が川に広がるだけで、見せずに描いている。映画って画面内だけでは完結しないんだよね。

**米津** ホラーもそうですよね。見えないことの怖さみたいな。でもそれには観客の想像力を信頼する勇氣が必要で、こういう演出ができる監督は本当にすごいんだなということをゼミで学びました。とはいえ、『七人の無頼漢』はぼくはあまりハマらなかったですけど(笑)

**大石** いい映画なんだけどもあ(笑)。まあ、人それぞれ感想が違うのも映画なんだよな。

—— ところで大石先生は「北の映像ミュージアム」(北海道をロケ地とした映像と関連史料を収蔵・展示する博物館)の理事も務められているそうですね。

**大石** はい。北海道はたくさん映画が撮られている場所で、私も「北海道と映画」というテーマで研究を続けています。米津くんには先日、映像ミュージアム収蔵作品のデータベースづくりを手伝ってもらいました。

**米津** タイトル、監督、製作年、製作国を入力する作業で、400本ぐらいありましたよね。大変でしたけど、映画が好きなので楽しかったです。観たことのない作品があれ

ば、自分用にメモをしながら。今度、映像ミュージアムで企画している上映会に合わせて冊子をつくることになっていて、米津くんも原稿も書くことになったんだよね？

**米津** そうですね。釧路出身で、『パブリカ』や『東京ゴッドファーザー』などのアニメ作品で知られる今敏監督について書く予定です。

**大石** ミュージアムの関係者には出版社やテレビ局など、メディアの仕事をしている人も多いので、就職活動の一環としても活用してくれればと思っています。

**米津** ありがとうございます。入力作業の日がコンサドーレの開幕戦と被っていてどちらに行くか悩んだんですが、映像ミュージアムに行ってよかったです(笑)。ところで先生、釧路を舞台にした『ホテルロイヤル』(武正晴監督/2020年/日本)は観ましたか？

—— 話は尽きませんね。続きはお二人でどうぞ(笑)

### Kazuhiisa Oishi

大石 和久  
人文学部  
日本文化学科  
教授



# My Favorite Place



## 東豊湯

札幌市豊平区豊平8条8丁目1-7  
011-811-0241  
14:30~22:30

水曜日定休  
料金 440円

※2021年6月現在

## サウナ10分、水風呂1分、休憩5分を3セットで極楽

サウナが好きなので、その日の気分で使い分けながら週2、3回は銭湯に通っていると思います。なかでも頻度が高いのは、自宅から近くて、料金的にも通いやすい東豊湯さん。主浴槽に加え、超音波風呂、気泡風呂、薬湯など浴槽が充実していて、もちろんサウナ&水風呂もあります。個人的な“サ道”のルーティンは、まず体と頭を洗ってから主浴槽に2、3分入って湯通しをします。それから体を拭いてサウナへ。体を拭くのは、皮膚についてお湯の気化熱で表面温度が下がり、汗が出にくくなるからです。サウナに10分入って、水風呂に1分、体を拭いて5分休みます。休憩しないと汗が出づらんです。これを3セット、場合によっては5セット繰り返し、最後にお風呂に入って体を温めてから出るという感じですね。そして番台の前でポカ리를飲んで帰ります。たまに贅沢をしてビールのおきもあります。サウナで「整う」という表現がありますが、あれは気持ちよくて頭が真っ白になるイメージです。もちろんその感覚も好きですけど、ぼくは汗をかいた後に入る水風呂の気持ちよさが一番かもしれません。頭も体もすっきりしたら、帰って映画に集中です(笑)

# My Favorite Things



## 専用レンタル袋

TSUTAYA

月額1,100円で旧作が借り放題の「TSUTAYAプレミアム」に入っています。ぼくが通っている札幌大通店では、同時に5枚まで借りられます。会員になると渡される自分専用のレンタル袋があって、最初は新品だったのですが、使い込んでいるのでかなり味が(笑)。TSUTAYAにはなるべく混んでいない時間に行き、ゆったりと探るのが好きです。24時間営業だったころは、深夜2時とかに通ってました。今は開店時間の朝8時に向かい、帰りに地下の立ち食いそばを食べて帰るのがルーティンですね。



## 映画リスト

TSUTAYAには必ず手書きの映画リストを持参し、それを見ながらその日借りるものを決めます。紙のほうがスマホよりも見やすかったりするんですよね。それで借りてきた映画を観たら、リストに線を引いて消すのがまた楽しいです。「よし観てるぞ」という感じがして(笑)



## ポップコーン

PrimeTime

家で映画を観るときは、椅子に腰かけたり、床に座ったりしていますが、ほぼ必ずポップコーンは脇に抱えています。最近はレンジで調理するタイプのポップコーンをネット通販でケース買っています。1袋わずか50円ぐらいで映画館気分を味わえるのが最高ですね。



## サタンタンゴ

Blu-ray Disc  
TCエンタテインメント

『サタンタンゴ』はレンタル盤がないので、思いきってブルーレイを購入しました。中古ですが、それでも7000円くらいしましたね。めちゃくちゃ後悔したんですけど、自分にとっての映画の原点でもあるので、持っているのが安心します。まだ通して観たことはありません(笑)



## 映画とは何か 上・下

岩波文庫

フランスの映画批評家、アンドレ・バザン(1918～1958)の著作です。個別の作品をピックアップしながら、映画について深く掘り下けているので、これを読んでからその作品を観ると、捉え方が大きく変わります。大石先生のゼミで3年生のときに使っていました。



## 少年少女 日本の歴史

小学館

高校で日本史を学ぶ際に、漫画のほうが入りやすいかなと思って全24巻をそろえました。大学に入ってから、日本史の講義などの復習がてら読みだしています。国内旅行が趣味なので、この漫画で行き先の土地の歴史を学んでから旅に出ることも多いです。



## ダーツ

ダーツは大学に入ってから始めました。放送研究会の仲間に誘われたのがきっかけですね。マイダーツも持っています。貸し出しダーツよりも重くて投げやすいので重宝しています。家にもボードがあって、映画鑑賞の合間に体を伸ばしながら30分ほど投げたりしています。



## G-SHOCK

CASIO

防水で高温にも耐えられるので、腕に付けたままサウナに入ることができます。銭湯では眼鏡を外すので、壁掛け時計がよく見えません。でも時間はしっかり測りたいので、腕時計が欠かせません。『サタンタンゴ』の鑑賞中にも何度かこの時計を見つめました(笑)



## WALKMAN

SONY

高校生のときに買って、今でも愛用しています。家からTSUTAYAまで歩いて行くときなど、音楽やポッドキャストを聴いています。音楽はandymoriというバンド、ポッドキャストは『石川・ホンマ・ぶるんのBe-side Your Life』という番組が最近のお気に入りです。